

Title	<書評>黒崎浩行著『神道文化の現代的役割：地域再生・メディア・災害復興』
Author(s)	陳, 重道
Citation	宗教と社会貢献. 10(2) P.79-P.83
Issue Date	2020-10
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/77222
DOI	10.18910/77222
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

書評

黒崎浩行著

『神道文化の現代的役割—地域再生・メディア・災害復興—』
弘文堂、2019年12月、A5判、280頁、3800円(税別)

陳重道*

1. はじめに

毎年、時節に応じて、居住する地域の神社へ足を運ぶことを多くの人は経験しているだろう。時には初詣、七五三祭りといった年中行事のため、時には当の神社の祭りに地域の人とともに参加するため、あるいは広大な敷地内にてただただ安寧を求めるため、神社を訪ねる理由はそれぞれである。しかしどんな理由であれ、私たちが訪ねるたびに神社は何かしらの効果を発揮していることに間違いはない。このような効果を含め、2000年代以降の現代日本社会における神社神道に関する文化とその担い手が果たそうとし、果たすように求められる様々な役割とこの課題に関する認識を宗教社会学の視座から解明する事こそが本書の目的である。

現代の日本社会では、特に1995年以降、阪神・淡路大震災、オウム真理教の地下鉄サリン事件といった時間が社会に大きな変化をもたらし、宗教団体が災害復興支援において社会貢献活動の実践を試みる一方、大衆の目は悪質な事件に囚われ、多くの教派神道を含めた新宗教ないし宗教全般をカルトと関連的に見るようになってしまった状況も実在する。さらに、インターネットの普及や少子化などの影響を受け、新宗教の衰退を数字の面では信者数の激減が物語ってきた。しかし、近年（特に東日本大震災以降）では災害時の宗教者によるボランティア活動に対して宗教社会学者らによる研究関心が高まると共に神社神道や教派神道を含めた宗教の社会貢献が注目を浴びるようになり、災害対応など社会福祉のために寺社が自治体と協定を結ぶ事例も増えてきており、神道文化が地域社会において重要な一役を買っていることが証明されている。本書では、神道文化を主な研究分野とする著者である黒崎氏が長年に渡って観察してきた地域社会、被災現場における様々な神道（特に神社神道）の働きをもとに上述の目的のために展開した議論であり、現代社会での神社神道とその文化がどのような立ち位置

* 大阪大学人間科学研究科 M3 u508170c@ecs.osaka-u.ac.jp

にあつてどのような実践を繰り返してきたのかを氏独自の神道文化に注目する視点から認識することができる一冊である。

2. 本書の構成

序論

第一章 渋谷の住宅地と神社祭礼

第二章 都市生活における共存と神社の関わり

第三章 神社祭礼におけるコミュニティ参加機会の創出

第四章 地域再生における宗教文化資源としての神社

第五章 インターネットと神社の関わりをめぐる議論

第六章 伝統宗教のインターネット利用と社会関係資本の形成

第七章 東日本大震災の被災地域再生に宗教が果たす役割

第八章 震災支援・復興に神社が果たす役割と課題

第九章 ふるさとと再生の困難さと神社

第十章 宮城県気仙沼市におけるコミュニティ復興と神社

第十一章 災害復興における生業の持続・変化と宗教文化

第十二章 避難と帰還の狭間

第十三章 渋谷の防災・減災と宗教施設・宗教文化

結論

本書の目次構成で示されているように、黒埼氏は神道文化の現代的役割を分析するにあたって、議論を「地域再生と神社」、「メディア・コミュニケーション環境と神社」と「災害・復興と神社」の三つの部分に分けた。

第一部では、氏は第一章の東京渋谷区での町内会を基盤とする祭り、第二章の東京都豊島区南大塚での住民を中心とする地域の関係構築、第三章の世代を繋ぐ地域づくりの参加機会を創出した熊本県青井阿蘇神社の祭りといった三つの事例をもとに地域再生のために活用された「宗教文化資源」としての神社像を描き出した。

第二部では、氏は現代社会にとって必要不可欠なインターネットのコミュニケーション空間において、神社を始めとする伝統宗教とそれによる人々の繋がりはどのように影響され、期待され、懸念され、または実際に利

用されてきたかを神社とその神道文化の担い手の視点に注目し検討した。

第三部では、氏は東日本大震災における災害救援及び復興過程における神社及び神道文化の役割を現地訪問による参与観察とインタビューを中心に検討した。詳しく言えば、氏は第八、九章では神社の被災直後の避難拠点と復興時の困難に向き合うための拠点としての役割、第十、十一章では地域づくりの担い手の再編と自然との共存に向けた役割期待、第十二章では福島県浜通り沿岸地域で再建する神社が避難と帰還の狭間にいる人々へ寄り添う役割、第十三章では東京都渋谷区の防災・減災の取り組みにおいて宗教が果たす役割を検討してきた。

結論の部分では、氏はこれらの事例をもとに、現代社会において宗教が果たすべき社会的役割を研究するために従来の宗教の社会的機能研究の前提となるデュルケムの「社会的統合」機能説と宗教が人間の究極的関心に対して答えを与えているという学説に無自覚に依拠することの危険性を示した。さらに、本書の事例は、「社会的統合」から「社会的包摂」への役割認識や実践の現れと、一方的な「説教」ではなく人々の霊的な苦しみへの「傾聴」や「寄り添い」という宗教者の取り組みの重要性も見えてきたと指摘した。

3. 神道文化という「宗教文化資源」の活用について

著者である黒崎氏は本書の研究を展開するにあたって当事者へのインタビューと参与観察を中心とする質的調査を行ってきたおかげで、評者は多くの神社が現代社会に適応するための働きかけを了解することができ、これらの認識から様々な発想に至った。その中でもまず着眼したいのは本書の第一部で論述された「宗教文化資源」としての神社という視点である。

本書の第四章によれば、まちづくりの際に宗教施設・宗教的空間、宗教的儀礼・行事などを歴史的な町並み・景観や地場産業などの「地域資源」と並べてとらえなおせば「宗教文化資源」と呼べる。また、関連的な論点として、本書でも度々提起される櫻井治男の主張で、地域神社を自然的環境、文化的伝承・創造環境、人的・社会的組織環境という三つの福祉文化資源を内包する存在と見る論述が存在する。評者は上述の二つの理論に深く共感しており、さらに地域の「資源」としての神社の独自性を強調したい。

神社とは、神道の信仰に基づき、各寺社それぞれの主な神を祭る場である。

そのために、同じ地域の中でも、住宅をはじめとするほかの建築よりもその場で長く鎮座し、根ざすことができる。それこそ地域を代表する歴史的なシンボルとして見えよう。さらに本文の冒頭で触れたように、神社には大きな敷地があり、その敷地を使った様々な祭りが毎年開催されている。言い換えてみれば、地域の中の神社はその特性により時間の軸から見る存在の「持続性」と空間の軸から見る「広大さ」と「公共性」といった性質を同時に備えている数少ない場所である。そのために、神社は地域内の異なる性質を持つ個体を集め、それらをつなぐ能力があり、その能力を十分に発揮させるひとつの実践として祭りを位置づけられる。そして、本書の第一部で三章に分かれて論じられたように、祭りでつながれる関係にも様々な様式があることを評者は肯定したい。

評者がよく見学する催しの中に大阪池田で毎年八月に行われるがんがら火祭りがある。家内安全や火難厄除けを祈願するために同市の愛宕神社からもらった神火を「大一」の火文字につけた後大松明に移され山から市内に運ばれる催しである。この祭りは町会によって運営されるもので、大松明の担い手や隊列は主に市の若者達で構成され、大人は指導する側に回っている。こうした役割分担によって市独自の文化は着実に祭りという形式で「世代間継承」を果たしている一方、市内を含め三キロもある練り歩きのコースはまさに市全体を巻き込もうとする勢いが込められており、新しく転入した住民に市の文化と地域コミュニティに溶け込むための機会を創出していることも確かであろう。

従って、神社は黒埼氏が指摘したように「宗教文化資源」として普段の地域のまちづくりに運用され、地域のソーシャル・キャピタルの蓄積にも貢献している。さらに災害後の生活再建期においても神社はその「持続性」や「公共性」によって復興祭りの開催主体となり地域の復興に活気を入れるために一種の「資源」として運用されるのだろう。しかし、このような営みで地域社会で大きな役割を果たしている一方、果たして神道教化は行き渡ったのだろうか。本書の著者は同じような懸念のもとでインタビューを展開し、参加者の中では「実践の文化を自分のものにする」ことで理解のある発言を得られた訳だが、単に見学する人々の中では祭りの騒がしさそのものに目を奪われ、その背後に潜む地域の文化と神道文化に気づかないでいる状況もあるのだろうか。と評者は疑念を感じている。

4. 終わりに

神社、神道文化は日本社会で長年に渡って深く根ざしている。近現代では悪質な事件や社会構造の影響により新宗教、特に教派神道の一部は信者数の減少をはじめとする衰退の様子を見せていたが、それらに比べて神社神道や神道文化は「非宗教」の一面もあって受けた影響が弱く、更に現在では神道文化による社会貢献への肯定的な評価は増えつつある。従って、神道文化の媒介として神社やその責任者は現代社会にどのように位置づけられ、どのような役割を果たせるのか、本書はこれらの問題のひとつの答えとして挙げられるべきだろう。たとえこの課題に関する全ての疑問に答えることができなくても、神道文化の担い手や研究者たちにその答えに導くための布石を、著者の黒崎氏が本書に用いた長年に渡る様々なフィールドで集めてきたデータで打ったのではないだろうか。現代における宗教、特に神道文化が社会貢献することや社会に適応するための働きに興味がある者、または今後の発展の仕方に迷っている神道文化の関係者にとって、本書は読むべき一冊だと主張したい。神道文化や神社との関わりが薄い方にとっても、本書は人それぞれの日常生活と関わる神社祭礼を深く認識し、より多くの角度から祭りや自らが住む地域とつながるきっかけになるだろう。

また、本書の結論の部分で著者は問題点として「地域を超えたつながりの可能性を神道文化はもたらしうるのか」と述べた。例えば本書第二部で論じられているような、インターネットを利用した活動に見られる神社間の資源配分の不均衡に関しては、災害救援活動を展開する際にボランティアセンターや社協が役割を分担するように、第三者が介入することにより、少しは解消することが期待できると評者は考えている。

参考文献

- 稲場圭信・黒崎浩行（編著） 2013 『震災復興と宗教』明石書店。
櫻井治男 2002 「神道福祉研究の展開に関する考察—福祉文化と神社神道に関して」『社会福祉の思想と制度・方法』永田文昌堂: 163-174。
篠原祥哲 2017 「熊本震災への対応：シンポジウム「被災地における人々のケア～宗教者の役割とその連携の可能性」報告」『宗教と社会貢献』7(1): 41-46。